

松任谷正隆の

僕のひとりごと

07

VOL.07 緑色のソファとベース

あれは確か中学3年の頃。

クラスの中ではちょっとませていたタイゾーが僕に話があるという。

すぐに話せないところをみると秘密めいた話らしい。

放課後になってようやく話してくれたのは、

某女子中学の女の子にベースを教えてやってほしい、というものだった。

僕たちは男子だけの中学。向こうは女子だけの中学。

なんだかやたら甘い誘いのように聞こえた。

ベースなんかやったことがないぜ、と言うと、

おまえなら何でも教えられるだろう、と言う。

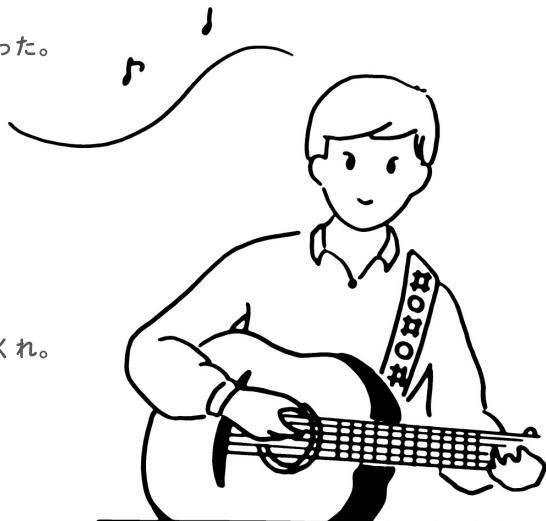
まあ、自信がないでもなかった。手を取り足を取り、教えてやってくれ。

なんだったら他のところを取ってもいいぜ、と言う。

いったい彼女はタイゾーとどういう関係なのだろう。

いろいろと考えてみたけれど、中3と言えば彼女がほしいお年頃。

もう何でも良かった、というのが正直なところだ。



何日かしてその彼女から電話がかかってきた。声からして同じくらいの年頃だった。

どきどきした。彼女は積極的で、1週間後に伺ってもいい?などと言う。

そうか、うちに来るのか……。まあ、アウェイよりはいいか、と思い、時間を指定した。

親が出かけていそうな時間で、僕は応接間を一生懸命掃除した。

緑色のソファは特に念入りにやった。案の定、その時間、親は買い物に出て僕一人になった。

僕は高井戸の駅の階段の下でどきどきしながら彼女を待った。

電車が来る度に心臓が破裂しそうになった。あの子か？あの子じゃないといいな……。

だんだん僕の頭の中は、可愛い子に違いない、ということになっていたのだと思う。

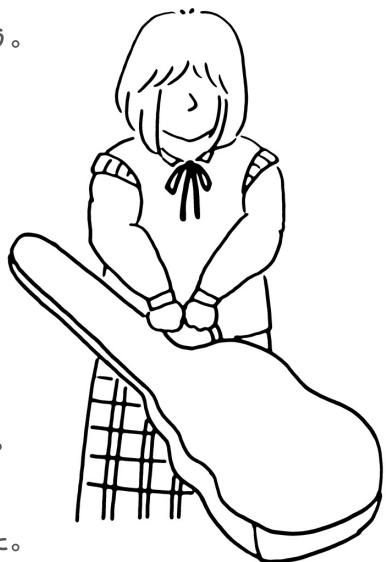
そして運命の時はやってきた。逆光でシルエットになりながら、

ものすごく大きなベースを抱えたプロレスラー、いや、彼女が降りてきたのだ。

瞬間、僕は知らぬ振りをして帰ろうと思った。

しかし、さすがにそれは出来なかった。

タイゾーめ、そういうことだったのか……。



まるで想像と違ったことに失望しながら、それでもうちに案内し、レッスンを始めた。

最初のうちはなるべく距離を取って教えていたのだけれど、

そのうち向こうがどんどん近寄ってきて、最後は僕の太ももでリズムを取り始めた。

えっ？ いったい何のつもりなのだろう。ドキッとする、ではなくヒヤッとした。

そのたびに僕は別のソファに移り……怖くて逃げ回っているのは見え見えだった。

応接セットの外周が100メートルくらいある感じがした。

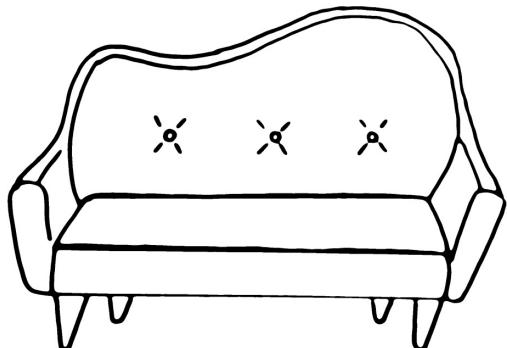
逃げて逃げて、逃げ回ったレッスンが終わると、彼女は、もう迎えが来るから、と言った。

なんだ？ 誰が来るのだろう、と思っていたら大学生がスカ G でやってきて裏で待っているという。

どういうことなんだ？ 彼氏ということか？ だとしたら、

僕を追いかけ回していたのは何だったのだろう。

いたずらか？ 僕をからかっていただけなのだろうか？



緑色のソファは、

そういうわけで僕の頭の中では永久磁石のように、

記憶から離れない存在になってしまったのだった。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンド SKYE を結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy